



五間道路沿いの町並み

町並みについて

- ◆多良木地区一帯は、明治初期までは相良藩の御倉屋敷があるのみで、明治5年時点では道傍にできた小店3軒以外は荒涼たる草原でした。明治中期に初代村長に就任した瀧田勇蔵が北海道札幌市を自ら視察し、幅員五間(約9m)の道路を整備したことにより、林業の中継地として栄え始めていた町の基盤が造られました。
- ◆町並みは札幌の先進的な都市計画に触発されて建設された自動車を通る道路と、その沿道に建ち並ぶ林業の富がもたらした建築群で構成されています。富の象徴として家紋や松竹梅、竜等の文様の鍍絵こてえが描かれた焼酎蔵、宿屋、商家などから、当時の同地区の活況を窺うことができます。



町並みの中心(核)となる伝統的建造物



木下醸造所

- ◆創業文久2年(1862年)の焼酎醸造所で、銘柄の「文蔵」は球磨地方の民謡「六調子」に謡われた創業者の名に由来しています。
- ◆建物は、寄棟造の茅葺屋根をZ型に架ける形式で、相良藩内独特の鉤屋造りかぎやうとなっています。同建物は間取り、扱首さくすと貫ぬきや棟束むなづかを併用した小屋組、床の間に貼られた唐紙など同町中原地区の太田家住宅と類似点が多いものの、大黒柱などの断面寸法が大きいことが特徴です。



百太郎溝沿いにある木下醸造所

同地区の町並みは、現在も材木運搬車が行き交う五間道路(現在の国道219号)沿いに商店や民家が密集しており、札幌の都市計画を範にした先人の想いが今に伝わっています。また、同地区には、木下醸造所など江戸期の建物に加えて明治末から昭和初期にかけて発展した商家などが現役で残り、これらの建築群に球磨地域の商店街の近代化の様子を見ることができます。